

Link+

ウェルネスを生み出す

Creating Wellness

SANU (本間貴裕氏 / 石川悠介氏) + ADX (安齋好太郎氏)

×

大林組設計部 (伊藤翔 / 高山峻 / 太田真理 / 法山千穂)

SANU (Takahiro Homma / Yusuke Ishikawa) + ADX (Kotaro Anzai)

×

OBUYASHI CORPORATION Architectural Design & Engineering Division
(Sho Ito / Shun Takayama / Mari Ota / Chiho Hoyama)



「Port Plus」2F 踊り場にて (前列左から安齋氏、本間氏、石川氏。後列左から高山、伊藤、法山、太田)
At the 2nd floor landing of Port Plus (from left in the front row: Anzai, Homma, and Ishikawa. From left in the back row: Takayama, Ito, Hoyama, and Ota)

白樺湖畔やハケ岳といった各地の森に別荘のサブスクリプション (「SANU 2nd Home」など) を展開し、都会の人々を自然の中へ導いていく SANU と ADX。一方、都市部に自然を導くべく、建築の木造木質化や緑化に取り組む大林組。

一見、逆方向からのアプローチかもしれないが、目指すところは近いのではないか。お互いの活動を紹介しながら、自然との共生、それによって生み出されるウェルネス、これからの未来像などについて、横浜・関内にある大林組の研修施設「Port Plus」(本誌 p.04 参照) にて思いを語り合った。

(注) 本記事の英訳及び録画収録の抜粋を、Web版 ARCHITORIUM 内、JOURNAL に掲載予定です。(巻末に QR コード掲載)

SANU and ADX have developed villa subscriptions ("SANU 2nd Home" etc.) in forests around Lake Shirakaba and the Yatsugatake Mountains to draw city dwellers into nature, while OBUYASHI CORPORATION is working to bring nature into urban areas by converting to timber construction and greening.

At first glance, the approaches may seem to be coming from opposite directions, but our goals should be very similar. While introducing each other's activities, we discussed the symbiosis with nature, the wellness created by such symbiosis, and future visions at OBUYASHI's training facility "Port Plus" in Kannai, Yokohama. (See p.04)

*English version of this article will be available in the JOURNAL of the web edition of ARCHITORIUM. (QR code attached at the end of the magazine.)

本間貴裕
株式会社 SANU
Founder / Brand Director

福島県会津若松市出身。2010年、「あらゆる境界線を越えて、人々が集える場所を」を理念に掲げ、ゲストハウス・ホステルを運営する Backpackers' Japan を創業。同年、古民家を改装したゲストハウス「toco.」(東京・入谷) をオープン。その後「Nui. HOSTEL & BAR LOUNGE」(東京・蔵前)、「Len」(京都・河原町)、「CITAN」(東京・日本橋)、「K5」(東京・日本橋) をプロデュース、運営する。

石川悠介
株式会社 SANU
Head of Business Development

森ビルに新卒入社し、用地取得から設計まで一通りの再開発事業に従事。主要プロジェクトは虎ノ門・麻布台 PJ。2022年に新たな挑戦先として SANU にジョインし、「SANU 2nd Home」をはじめとする事業開発部門を統括する。SANU を通じて自らと家族のライフスタイルを模索する。一級建築士。

安齋好太郎
株式会社 ADX
CEO

1977年福島県二本松市にて、祖父の代から続く安齋建設工業の3代目として生まれる。2006年自然と共生するサステナブルな建築を目指し、ADX を創業。「森と生きる。」をフィロソフィーに、自然と共生する建築を最重視し、自然に戻しやすい素材だけを使う工夫や建材のトレーサビリティのデザイン、林業や森づくりといった木の循環まで視野に含める建築の設計・施工を専門としている。登山がライフワーク。

未来への可能性を感じる「Port Plus」

太田真理(以下、太田) 先ほど、「Port Plus」をご覧くださいましたが、いかがでしたか。皆さんの率直な感想をお聞かせください。

本間貴裕氏(以下、本間氏) 最初に思ったのは、外見がカッコいいなど。この建物を目指して来たときに、周囲と明らかに違う建物があって、それが木造っぽく見えて目を引きました。構造体を木材にしても耐火の処理をしなくてはならず、もしかしたら木造に見えない可能性もあったけど、デザインのソリューションを使って外からも中からも木材が使われているとわかるような工夫がされています。そこから、そもそもなぜ木造でビルを建てる必要があるのか、木造で建てるって何かいいことがあるのかという思考が始まるので、見た目でわかりやすく木造で建てることに意義があるんだろうなと感じました。

一方でそれが自然にとっていいことなのかどうか、木造のために木を色々なところから運ぶ輸送コストがかかっているとか、外皮を使うことで余計な素材を使っていたりするのも事実だと思います。とはいえ、このパイロットプロジェクトを機に色々な木造建築が増えていくのかなと楽しみにしていました。

SANUの設計過程とも重なる部分もあり、造る過程で難しいハードルがあったんだと感じました。SANUの中で取り組んでいくべきだと思っているのは、ウェルネスの部分。「Port Plus」の宿泊施設では、

部屋の中で色々な実験や調査がされているのが新鮮で、とても参考になりました。顔認証やタッチパネルで照明や空調といった室内環境をコントロールできたり、人の睡眠をリサーチしたり、テクノロジーを活用した、今後の展開に可能性を感じました。^{*1}

安齋好太郎氏(以下、安齋氏) 同じく木造建築に携わる者として、設計も施工もすごく苦労したところが節々に見られて、大変ですよなと思いつつ拝見しました。でもこれって、実は昔はできなかったことでもあります。法律やコスト、それを受け入れてくれる社会ではなかったからです。でも今はチャンスが訪れて、このビルが完成したのは大きな一歩であり、持続的に進めることがこのビルから発信する次のエネルギーになっているんだと思いました。

先に話に出ましたが、外観がカッコいいし、カッコいいものができることを真似したいというトリガーになるんじゃないかと思います。それをきっかけにして、そもそもなぜ木を使うのか、なぜ木造が重要なのかというところにみんなが理解を深めていく。それがこれからの未来を象(かたど)っていくのに必要なものなのかなと。「Port Plus」は木造による高層建築ということで、面白いし挑戦しているし、色々な技術を勉強されているのがわかりました。そしてあらためて、私たちも勉強しなくてはならないと感じました。

^{*1} エネルギーの見える化、空調や照明の快適性を制御するスマートビルプラットフォーム「WELCS place™(ウェルクス プレイス)」。



「Port Plus」5Fにて(スマートビルプラットフォーム「WELCS place™」の案内)



「Port Plus」8Fにて(対談風景)



「Port Plus」3Fにて(純木造のためのソリューションの説明)



本間貴裕氏 (SANU)



「SANU CABIN」内観 (大きな窓から自然を望むキャビン)



高山峻 (大林組設計部)

木造建築であることの意義

伊藤 翔 (以下、伊藤) 私たち大林組設計部は「価値をデザインすること」をビジョンに掲げています。「Port Plus」でも色々な価値をデザインしようとしていて、ここに研修に来た社員が気持ちよく研修を受ける中でウェルネス(こころとカラダの健康)への気付きを生み出したり、コミュニケーションを生み出したり。こうしたユーザーの体験という価値はわかりやすいですが、一方で、木造である価値はなんだろうと自問自答する部分もあります。

まずは循環型社会における社会的な価値という点です。それに対する価値を数字として明らかにして、定義していくのが大きな使命だったかなと。それってユーザーにとって刺さる価値なのか、社会と人の価値は収斂していくのかと個人的には疑問があります。SANUさんは、「自然の中で暮らしを営む」というユーザーに刺さる価値を提供しながら、「サークュラー建築である」という社会を意識した価値も謳っていますが、サークュラーであることがユーザーに刺さっているのかどうか、感じていますか？

本間氏 その点については創業パートナーの福島弦(SANU CEO)とよく話していたんですが、結論から言うと刺さっていません。たとえばスポーツウェアを買おうとしたときに、環境にいいから買おうということはあるかもしれませんが、その前にまず、シンプルなデザインで動きやすく丈夫だから長く着られるよね、だから買う

う、と思いませんか。購入の判断の入り口は「デザインや機能性」とかで、出口は「環境にいい」だと思うんですね。

だから SANUも「環境にいい SANU」という切り口は考えたけど、やっぱりそうじゃなくて、あくまで人と自然のライフスタイルを提案するのが SANUで、自然を好きなのであれば自然に対してリスペクトの気持ちを持って仕事に臨むという姿勢は大事だけど、ユーザーに対してその意識を訴えようとはしていません。今のところ、その方向性で正しかったと思っています。

高山峻 (以下、高山) 「SANU 2nd Home」の滞在施設である「SANU CABIN」は、サークュラーであることを意識して全体を考えられたのでしょうか？

本間氏 はい、意識しています。

高山 ユーザーに刺さるコンテンツを求めたら、おのずとサークュラーになったのか、コンテンツをサークュラーな文脈に乗せる工夫を伴って出来上がったのか、どちらでしょうか。

本間氏 「SANU CABIN」は安齋さんが率いるADXが設計・施工していますが、彼は山が大好きなので山を壊したくないんです。山が好きな人が好きな山を守るために創ったわけで、それは僕らのストレートな気持ちです。プロモーションやブランドイメージは付加的に出てきたのだと理解しています。

伊藤 結果的に、資金調達しやすいつか、社会的な評価が後からついてくるということもありますか？

本間氏 そうですね、一部あると思います。資金調達でいえば、サステナブルなものが資金調達しやすくなるには、日本ではもう数年かかるんじゃないかなと思っていて。ただ、サブスクを申し込むエンドユーザーにとっては、特に子供がいたりすると次の世代にいい環境を残したいというのは自然に持つ感情なので、こういう企業だったら応援したいよねという気持ちが十分にありえますね。だから一部、という表現が正しいと思いました。

たとえて言うなら、昔はポイ捨てが普通にあったけど、いつの間にかポイ捨てするのはすごくカッコ悪いし非常識だとなりました。同じように、今は環境適合とかサステナブルなものをつくるのが、どちらかといえば特殊ケースかもしれない。でも10年後や20年後は、それが当たり前になる時代がくるのかなと。ポイ捨てしないことが宣伝になるわけじゃなくて、人としての常識で、長期的に未来をとらえて活動していくのが当たり前になっていくので、それを粛々とやっていくことが大事です。とはいえSANUも企業なので、粛々とやってもまったく情報発信しないし誰も知らないことになってしまいます。フロントラインでサステナブルを謳うわけではないですが、我々がやっていることはこういうことですよ、ということを情報として見せておくことが大事だと思います。

SANUとしては、自然の中にあるセカンドホームで気持ちよく時間を過ごそうというのをメインメッセージにしながらも、次のページには「環境にいいことをやっていますよ」というメッセージを明確に

示す。そのバランスがいいのではないかと考えています。

高山 「Port Plus」は会社として木造であることを前面に押し出す前提のプロジェクトでした。ですが、木造であること自体はエンドユーザーにとってはどちらでもよくて、仕上げが木であれば構造部材は木であってもなくても変わらないと思います。そこで、木造か否かという物理的な話から離れ、その上段のコンセプトはウェルネスと設定し、木という素材のストーリーも包含しながら体験者にとっても社会にとっても健やかな場づくりを目指すこととしました。

本間氏 社会を前に進めるとか、未来をちょっと先につくっていくのは、つくり手にとって幸せだったりします。そういう意味では、「Port Plus」は健康的なプロジェクトであり、社会的に見ても一企業として見ても意義があるものなんだろうなと感じますね。

伊藤 ゼネコンでしかできなかったプロジェクトだったと思います。大林組は「つくるを拓く」というスローガンを掲げていますが、新しいつくり方にチャレンジして次に循環させていくところまで視野に入れて進めていくことで、やりがいや醍醐味をすごく感じました。



剛接十字仕口ユニットの模型



太田真理(大林組設計部)

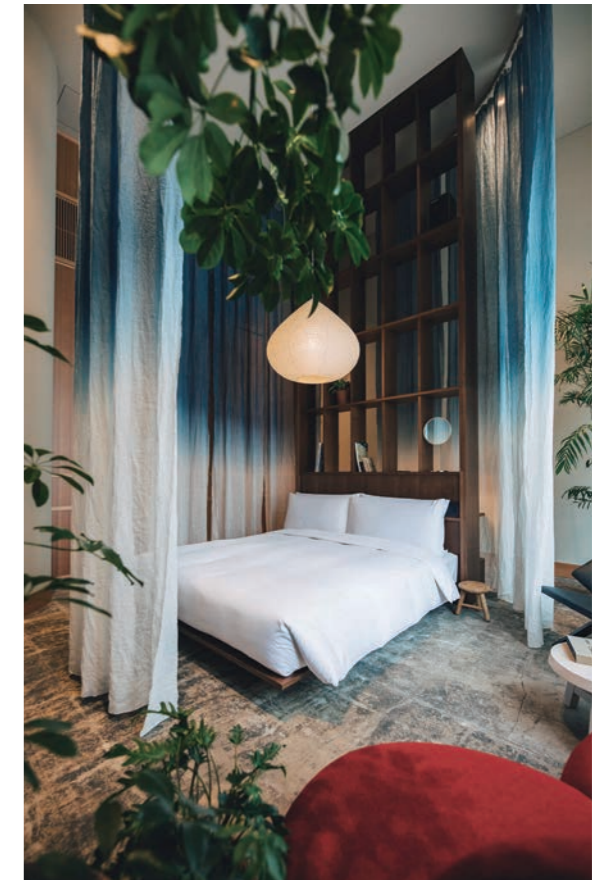
感性への仕掛けで自然を感じさせる

太田 「SANU CABIN」は森の中で、既にそこにある自然の色々な要素を感じ取れるように建てられています。都市の中で、自然を感じさせる何かを建てるとしたらどうというアイデアがあるのか、伺いたいです。

本間氏 安齋さんと初めて組んだのが、日本橋兜町の「K5」でした。自然を都市に持ってくる実験的なプロジェクトでもあったのですが、植栽をたくさん持ってきたら自然なのか、ソーラーパネルを置いたら自然なのか、それぞれ木造なら自然なのか、自分の中では何が自然なのか答えが見出せませんでした。そこで、感性として自然を感じられればいいのかと仮説を立てました。都市に住んでいると、自然はよくて都市はよくない、人工はよくないという考え方になりやすいけど、自然の中にも心地よい自然と心地悪い自然がある。空気が淀んでいて蚊がたくさんいてあまりここにいたくない自然もあれば、風が通って水が清くて気持ちいい自然もあります。都市もまたしかりで、この一角は空気が淀んでいるなどというところ、風が抜けていないと思うところがある。人間も自然の一部だから人間が創るものも自然の一部だと考えると、心地がいいかそうでないかという判断軸が自然がいいかどうかと言っているのではないかと理解しました。

高山 自然の要素がないところで自然を感じさせるには、人工的に何かを創るということになりますが、それは本来はフェイクですよ。でもそうして創ったものを自然だと言いたい、という気持ちもあります。

本間氏 結果として「K5」は観葉植物もたくさん置いたけど、藍染のカーテンを掛けたことで空や海のニュアンスを感じてもらったり、窓を開けると風が入ってきてカーテンが揺れることで風を感じたり、鏡を見ると赤いランプが点っていてそれが太陽を彷彿させたり。スピーカーはいいものを入れて音がナチュラルに聞こえたり、そうやって感性に対する仕掛けを重ねることで、丘の上や湖畔で感じる気持ちよさ、自然と自然体は深くつながっているんじゃないかと思って、「K5」はそこを目指しました。別の観点で、自然を都市に持ち込むとか都市の中での住まい方を考えると、やれることはまだあります。都市の中で過ごしたい場所が僕にはほとんどないんですよ。それは経済合理性が追求された結果、すべてが四角くなっていて、建ぺい容積いっぱいになっていて。心地よさより経済合理性が追求されて都市が形成されているからです。都市からちょっと離れたサブ都市は新しく作るという意味では色々なことができるはず。それはたとえば、木造とかゾーニング。四角く区切られた空間で過ごしていると人間の思考も四角くなるけど、森の中にいると森は全部曲線で構成されるので思考もやわらかくなるし、人当たりもやわらかくなるんじゃないか。ゾーニングとか木造とか、空の広さを考えたり、風の入り方を考えるといったことを細かくやっていると、今までのマンションづくりとは全く異なるものができるんじゃないかと思っています。



「K5」客室(自然を感じさせる藍染のカーテンがベッドを囲う)

木を愛することで人が集まる

安齋氏 僕は工務店の3代目で、もともと木を扱うのが当たり前でした。木を買いに行くときに山に行くのですが、そのときに、いい山と気持ちよくない山があることに気がきました。その背景をよくよく学ぶと、気候変動や日本の林業の構造など大きな課題が見えてきて、世の中が変わっているんだ、じゃあもっと丁寧に使おうと思って、より木を愛し、より森が好きになっていきました。「森と生きる」というフィロソフィーを掲げて言い続けていたら、木が好きの人が集まってくるようになって。木造建築をつくりたいという人はもちろんですが、それ以外にも、植物に詳しい人とかエネルギーに詳しい人とか、なるべく異なった専門性の受け入れを心がけています。

伊藤 それはいいものができますね。

安齋氏 そうですね。建築って色々な情報が組み合わさってできていきますが、建築の基準だけでつくとみんな同じ形になってしまいます。色々な技術や知恵が集まって、初めて素敵なものが生まれてくる。設計者だけでなく色々な人が集まって、森という生物多様性のようなことが会社にも起こるんじゃないかなと思います。

太田 私は「Port Plus」で初めて木造にチャレンジしました。建材が木になった途端に色々な人が集まり、関わりやすくなったのが建築としては面白くて魅力的でした。そのようにネットワークを作り出せる素材として、木造・木質化建築にこれからの可能性を感じています。先ほどの話で、「環境にいい」という切り口は、購買意欲につながる選択肢としては最後に登場するとありましたが、これからはその選択自体もウェルネスにつながっていくんじゃないかと思いました。木造化することのコストの話は避けて通れませんが、ウェルネスが選択の決め手になるんだとアピールできるようにしたいです。



安齋好太郎氏(ADX)



「K5」レストラン(観葉植物を配している)



「SANU CABIN」外観（木をできるだけ切らずに、キャビンを設置している）



石川悠介氏 (SANU)

自然を邪魔しないデザイン

法山千穂（以下、法山） ミヤリサン製薬のような製薬工場では、防虫対策のために自然を取り入れることができません。私はその工場の隣に食堂棟（本誌 p.34 参照）を設計したのですが、人が心地よくリラックスするのに効果的な自然の取り入れ方として、感性を刺激するんだという先ほどのお話を伺って、私も同感です。自然は場所によって違う表情を持っていますが、そういう場と同じ形のキャビン計画するというのは不思議である一方、同じ形だとまるからこそ各滞在場所の自然が主役になるのかなとも思います。今後、「SANU CABIN」をアップデートしていくとのことですが、どういう方向でアップデートしていくのかポイントを知りたいです。

本間氏 まず、同じデザインのものをつくる理由は2つあって、1つは経済合理性。社会にとっていいことや未来をつくる行為は、せっかくなら広がってほしい。時間には限りがあるのでスピード感を考えたら同じものをちゃんとつくっていくほうがいいと考えま

した。僕らがつくる家はスマホとか車のようなプロダクトをつくる考えに近くて、それが繰り返しつくり続けられるポイントだと思います。もう1つはデザイン。究極的に突き詰めていくとデザインは自然の形になります。その土地に生えている植物は何十年も何百年もかけてその形に落ち着いているので、人間はそれには勝てない。自然にあるそのままが美しいので、僕らがつくるのはそれを邪魔しないミニマムでいいんじゃないかと考えました。白い上質な器を目指すということを安齋さんが言っていますが、白い上質な器に何かを置いたらそれっぽく見えます。たとえば松を置いたら日本っぽく見える。パインナップルやハイビスカスならハワイだし、メイブルの葉っぱならカナダっぽい。器がシンプルであればあるほどその土地のデザインを生かし切るのではと思って、同じデザインにしたわけです。

安齋氏 実は、全部同じ形だと聞いてちょっとショックだったけど、これはホテルじゃなくてももう一つの自分の家。自然の中に滞在してゆっくりしたいのであって、建物を見に来るわけじゃありません。

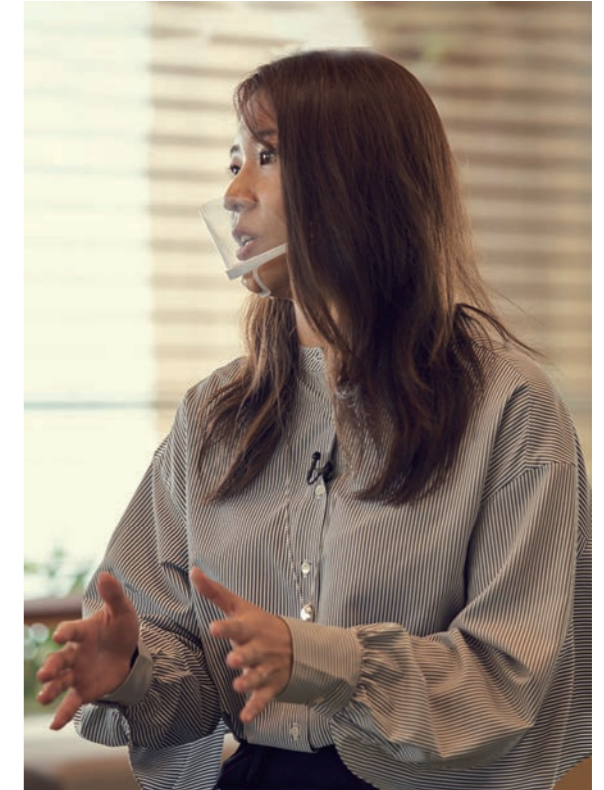
建築は白い器でよくて、そこで快適に過ごすための一つの特徴としてあの大きな窓があります。「SANU 2nd Home」に繰り返し通うことで自然を見る時間をつくるとか、家族とのコミュニケーションをちゃんとつくるといふ方向にSANUは向かいます。彼らが滞在しているときにこんなのがあったほうがいいな、これをすると滞在時間が長くなるなということに集中して、キャビンをアップデートしていきます。

高山 キャビン自体が白い器だということですね。次に、単に同じ器を並べるだけとはいかないはずで、置き方やキャビン同士の関係性などで試みた内容はありますか？

安齋氏 僕らの観点で言うと、「その場所にお邪魔する」なんですよ。「SANU CABIN」は向いている方向がバラバラで、それはそこにある木の植生を最大限に生かそうとしているから。極力、木を切らないというか、自然の中にお邪魔しているからあの間隔になっています。無造作に置いてあるように見えますが、あと何年かしたら木が伸びて、キャビンはほぼ隠れてしまうのではと予想しています。何かを強制的に作るよりも、そこにある生態系にちゃんとなじむ方に力を入れたいと考えました。

本間氏 恐れずに言えば、マスターピースを狙っています。シンプルシティを極めるとちゃんとカッコいいのに飽きない、という境地にたどり着くと考えています。ホテルじゃなくて家だからダサくていいよねじゃなくて、カッコいい必要はあるけど飽きてはダメ。それはデザインに妥協しないことでもあるし、飽きたときにデザインを変えられる可変性でもあると思う。そこをあきらめずに狙いたいです。太田 「SANU CABIN」を見学させていただき、何か特別なことをしなくても、あの場にいるだけで快適に過ごすことができるというのが入った瞬間に感じ取られました。敷地によって違うデザインのキャビンがあった方がいいのでは最初は思いましたが、お話を伺ったら同じ形にすることで、自分のセカンドホームとして、「帰ってきた」と思えることがいいなと納得しました。

石川氏 SANUの特徴は、色々な拠点を自由に使うことができること。しかも、これからもっと拠点が増えます。建物自体の面白さよりは、周りの自然や各地域のカルチャーを色々楽しんでもらえればいいですね。



法山千穂 (大林組設計部)



「ミヤリサン製薬食堂棟」(木の梁による、大きな木の下のような空間)



左から本間貴裕氏 (SANU)、伊藤翔 (大林組設計部)

ウェルネスをもたらすための仕掛け

伊藤 ウェルネスには健康と幸福という意味がありますが、幸福について伺います。コロナを経て、人とのつながりが幸福感につながるというのは非常に大きなテーマになりました。この研修施設は、研修者同士に偶発的な出会いやつながりが生まれるように考えられています。一方で、SANUさんがまずは大事にするのは家族や一緒に来た人との時間とのことですが、「SANU 2nd Home」の会員同士のつながりを作ろうとか、そういったニーズはあるのでしょうか。

本間氏 コミュニティというのは諸刃の剣だと思っていて、使い方を誤ると難しい、扱いづらいものになります。人とのコミュニケーションは幸せをもたらすこともあるけど、プレッシャーやストレスといった不幸をもたらすことも。特にクローズドコミュニティといわれる抜けられないコミュニティは、圧力や強制力があるのでとても気をつけています。SANUでは、人と話したいなと思ったときに話せるくらいがちょうどいいと思います。そのため、ソフトサービスでコミュニティを作る方向に僕たちは振り切っています。

たとえば、花火大会とか納涼会でワインを飲んで話したりとか。ソフトコンテンツを細かく打っていきと、人と話したいと思えば参加すればいいし、プライベートに楽しみたいときはキャビンでプライベートに過ごすのもいい。大事なのは選択できることで、SANUはその指針を貫いています。

伊藤 つながりから得られる幸福感も、コミュニティという環境が大事ということですね。ウェルネスとは心身の健やかさで、それは環境に起因する健やかさでもあります。大林組としては社員にもウェルネスな状態であってほしいし、業界としてはユーザー側にウェルネスをもたらす建物を創るのがミッションだと思っています。そういう意味では、この「Port Plus」は研修施設であると同時に、ウェルネスに関する実験場でもありますね。今回のクロストークでは、SANUさんのお話で「感性で感じるのが大事だ」という言葉が腑に落ちました。自然の中になぜ行くかという健康になりたいから。でも人工的に造られた場所や建物であっても、その人が健やかと思える環境を提供するのが、大林組が目指すウェルネスだと思っています。SANUさんとはリンクする部分も多いので、これを機にまた情報交換をさせてください。



「Port Plus」5F (半屋外のテラス吹き抜け)

